

四季・布由子



五木寛之

五木寛之

Itsuki Hiroyuki

1932年、福岡県生まれ。66年『さらばモスクワ愚連隊』で小説現代新人賞、67年『蒼ざめた馬を見よ』で直木賞、76年『青春の門・筑豊編』ほかで吉川英治文学賞を受賞。代表作に『朱鷺の墓』『戒厳令の夜』『風に吹かれて』『大河の一滴』『人間の関係』『生きるヒント』シリーズなど多数。

黒沢はウェイターを呼んで、布由子に水をもってこさせた。布由子は礼を言ってそれをひと口飲んだ。

「わたしはきつと、はじめてセックスをしても全然、平気なんじゃないかしら」
と、ふと彼女は思った。

19

その年の夏は雨がよく降った。九月にはいつても、気持ちのいい快晴の日はほとんどなかった。一日のうちに何度も驟雨しゅううのような雨が降ったり、台風がきたわけでもないのに強い風が吹き荒れたりした。

そんななかで布由子の生活はすこしずつ一定のリズムをもって流れていった。

土曜日には赤坂のラジオ局のスタジオへいく。そこでスタッフが集まる前に部屋をかたづけ、大まかな台本にしたがって資料室からレコードを運び、出演者やゲストのための飲み物や軽食の用意をし、番組がはじまると、中垣昇のアシスタント・パートナーとしてマイクの前に座る。

放送中の布由子の仕事は、中垣の言葉にうなずいたり、短く相づちを打ったり、

あるいは葉書あてさきの宛先を読んだりといった、どうでもいいような受け答えがほとんどだった。

しかしそれでも、中垣昇はひとりでマイクにむかっていたときよりもはるかにリラックスして、しゃべりやすそうだった。

「わたしは壁なんだわ」

と、布由子は考える。ボードにむかってテニスの練習をするように、中垣昇には生きた壁が必要なのだ。目に見えないマイクのむこうの聴取者を想像しながらしゃべっているときより、布由子を前にして語りかけたり、意見をきいたり、微笑ほほえんだりしているときの中垣昇のほうが、はるかにいきいきとしている。

マイクを前にしてほとんど動揺せず、にこにこ笑っている布由子の落ち着きが、かえって中垣をリラックスさせているようだった。

そのうち彼女はすこしずつ、台本構成の仕事も手伝うようになった。土曜日のスタジオの作業が終わったあと、スタッフや中垣たちと軽い夜食をとりながら、何週分か先のテーマについて語りあう。そしてそのテーマにそった話題を集め、それにふさわしい曲を選んで、家で大まかな構成案をつくりあげる。布由子はそんな仕事が好きだった。

芝公園の近くにある公立の図書館へ出かけては資料をコピーしたり、レコード会社から番組宛に送られてくる宣伝用の音盤のなかから気に入った曲を選んだりする。もちろん、実際に録音するときは、台本どおりには進まない。中垣昇のアドリブのおしゃべりが全然ちがうほうに脱線することもある。だが、あらかじめ構成ができていることで局のほうも代理店のほうも安心して仕事を進められるらしい。

ときたま外部の人がスタジオへ姿を見せたりすると、ディレクターは布由子のこととを、

「こちら、番組構成者の小峰さん」

と、紹介したりすることがあった。そんなふうに言われると、布由子はすっかりあがってしまつて、いえ、ほんのお手伝いです、などと謙遜したりするのだが、それでも本当はともうれしかった。橋場邦彦が代理店を経由して布由子の口座に毎月振りこんでくれる約束の金額に対して、わずかではあるがうしろめたい気持ちをもたずにすんだからである。

黒沢は週に一度か二度、必ず電話をくれた。そして時どき、布由子をいろんな催しに誘つてくれた。

オペラを観にゆこう、と黒沢が電話をかけてきたのは、九月下旬の雨の日の午後

だった。

「こないやな天気の日、うちにじつとしているのはよくないぜ。目がくらむくらい華麗な舞台を観にゆこうじゃないか。すぐ用意して、渋谷まで出てきたまえ。イタリア・オペラはべらぼうに体力が必要なんだ。しっかりめしを食つて、それから乗りこもうじゃないか」

「オペラって、あの、オペラですか？」

布由子は自分でもばかばかしいような答えかたをした。

「そうさ、ミュージカルじゃなくて、時代がかった本格的なオペラだよ。きみはオペラは嫌いなのかい？」

「嫌いなものも、一度も観たことがないんですもの」

言つてしまつてから、布由子はオペラを観にゆく、と言えがいいのか、それともききにゆくと云えがいいのか、急に恥ずかしくなつて、片手でごつんと頭を叩いた。「でも、イタリアのオペラって、イタリア語でやるんでしょう？ ストーリーがわからなくてもいいんでしょうか」

「だから、会場へいく前にめしを食いながら大特急でレッスンをやるさ。じゃあ、公園通りをあがつて右側の〈エル・パソ〉というレストランで四時半に。そんなに

気取ることはないけど、一応それらしい格好かつこうをしておいで」

電話はむこうからきれた。布由子は受話器を握ったまま、あわてて一応の服装とはどういう服装かと黒沢にきこうとしたが、もう手遅れだった。

布由子はオペラなどというものをこれまで一度も観たことはない。ただ、古いヨーロッパの映画で、オペラ座でヒロインが貴族の青年と恋をささやくシーンを観たことがあるだけだ。

正直に断わればよかった、と布由子は後悔した。一体、黒沢はどんな格好かつこうをしてくるのだろうか。彼のことだから、ひよっとするとタキシードでも着てくるのかもしれない。そうだとすれば、一体、自分はなにを着ればいいのかだろう。

《でも、黒沢さんはジーンズ姿であらわれそうな気もするな》

これまで彼と何度かいろんな場所へいったとき、いつも黒沢は意表をつく服装であらわれたものだ。

《それにしても、どうしよう？》

布由子は部屋のなかをぐるぐる歩きまわりながら考えた。もっている服をひと通りたしかめたが、どれもみなオペラに着ていくような感じではない。

《いまからどこかへ買いにゆこうか？》

しかし、それだけの時間はないし、それに予算が問題だ。

《困ったわ》

布由子は深呼吸して心をしずめた。それから、ふと思い出してアドレス帳をひろげた。

《こんなときは河本さんに相談するのが一番いいんだわ》

自分に言いかけさせるようにして彼女は中垣昇のオフィスの電話番号を押した。

「もしもし、小峰布由子といいますけど、河本さんいらっしゃいますか」

「河本は代官山のQスタジオへ出かけてますけど」

と、アルバイトの女の子の声が答えた。布由子はその場所の電話番号を教わると、札を言って電話をきった。それからあらためて電話をかけなおすと、スタジオの係の人に彼の呼び出しを頼んだ。

「もしもし、河本です」

くったくのない河本青年の声ができこえてくると、布由子はほっとしてため息をついた。

「どちらさまですか」

河本の声はどこかビジネスライクでよそよそしかった。わたしの名前を取り次ぎ

の人が伝えてくれなかったんだわ、と布由子は思った。いつもあんなに優しい河本青年も、仕事の最中はこんな声を出すのだろうか。

「小峰ですけど」

と、布由子は言った。電話のむこうで河本が、あ、と小さく声を洩らすのがきこえた。

「布由子さん？　ほんとに？　驚いたなあ。いま、どこからかけているんですか？」

彼の声がいつもの調子にもどったことで、布由子はほっとした。すこし甘えた口調で彼女は言った。

「自分の部屋からです。じつはちょっとご相談があるの。でも、いま、お忙しいんでしょう？」

「いや、仕事はもう終わったところです。きょうは昔のスタジオのオーナーに頼まれて、臨時の助っ人に出てきてるんですが、ちようどいま帰りかけようとしてたところ。でも、うちのボスはいまここにいないんだけどなあ」

「そうじゃないの。中垣さんにじゃなくて、河本さんにご相談したいことがあって」

「どうぞ。なんでも遠慮なくおっしゃってください」

河本が改まった口調で言ったので、布由子はすこし口ごもって、

「そんな、たいしたことじゃないんです」

「わかった。いまの部屋が気に入らないんでしょう。いいですよ。また新しい部屋をぼくが探してあげますから」

「ちがうわ。そんなことじゃなくて、ほんとに自分で決めればいいことなんですけど」

ちよつと躊躇してから布由子は言った。

「じつは、今夜、オペラにいくの」

「オペラ？」

意外そうな声だった。

「オペラって、あのオペラですか？」

「ええ。イタリアから来た有名なオペラなんですって。夕方四時半に近くのレストランで待ちあわせしたんだけど、一体、なにを着ていこうかと思つて。だつて、オペラって、みんなすごい格好していくんでしょう？　わたし、なにもそんなに改まった服もつていないし、どうすればいいか河本さんに教えていただこうと思つて、

お電話したんです」

「オペラ、ねえ」

ちよつと困惑したような口調で河本が言った。

「でも、最近はオペラといったって、そんなに正装していくような雰囲気じゃないんじゃないですか。まして日本のことだし。まあ、なかにはタキシードやイヴニングを着てくる特別なお客さんもいるだろうけど、うちのボスなんか、ふつうの格好でウィーン・オペラの初日に出かけてましたよ。外国でも天井敷の安い切符を買ってオペラを観^みにくる若い学生たちは、セーター姿にジーンズはいてるのもいるって話だったし」

「でも——」

自分だけで観るのならともかく、今夜は黒沢と一緒になのだ。そのことを河本青年に言おうかどうか、一瞬、布由子は迷った。

「わかりました」

と、河本が言った。

「いま一時半だから、かなり時間がありますよね。いまからこつちへ来てくれませんか」

「そちらのスタジオへ？ どうして？」

「布由子さん、せっかくぼくにまかせてくれるんだったら、なんにも言わずにそうしてください。スタッフはもうみんなそろそろ引きあげるところですから、ほかに誰もいないし、こういうときくらいぼくがお役に立たなくっちゃ」

河本青年は早口で代官山のQスタジオの場所を説明した。普通の家を改造したこぢんまりした場所だという。

「何分ぐらいで来られそうですか」

「そうですね。一時間以内には」

「じゃあ、待ってます。受付で河本に用事とおっしゃってください」

彼はもういちどQスタジオの場所をくり返し説明すると、それじゃ、と電話をきった。

「河本さんは一体、なにを考えているのかしら？」

布由子はいつものように目立たないメイクをしながら、頭をひねった。

黒沢との約束の時間は四時半だ、おくれないうちに出かけなくちゃ、と布由子は鏡のなかのすこし上気した自分の顔を眺^{なが}めながら考えた。

Qスタジオは、代官山の駅から歩いて十分ほどの場所にあった。

あたりは静かな住宅街で、とてもこんなところに写真のスタジオがあるなどとは思えない。黄葉したプラタナスの木が前庭に何本か植わっている閑静な一画だった。普通の住宅を改造したものだというのが、それにしても都心のこんな場所に庭付きの自宅を持っているというのは、どんな人なんだろう。

白い木造の建物で、入り口のところに、Qスタジオ、と小さな看板がかかっている。駐車場に、おとなしいグレイのボルシェ911が四つの脚をふんばるようにうずくまっているのを布由子は眺めた。

受付で河本青年のことをたずねると、すぐに彼が姿をあらわした。

「はやかっただすね」

「ごめんなさい。本当はご迷惑じゃなかったのかしら」

「さっき言ったでしょう。仕事はもう終わっただんです。さあ、こちらへどうぞ」

河本青年に案内されて階段をのぼると、そこは中二階のような小部屋になっていた。隣の部屋に簡単なキッチンがあり、こちら側は横に長い鏡の前に椅子が並んでいる。部屋の隅をカーテンで囲ってあって、そこにはビニールの袋に包まれたたくさんの服がぶらさがっていた。すぐ目の下にスタジオが見える。そのスタジオが果

たして大きいのか小さいのか、布由子にはわからない。

外から見ると普通の家に見えるのに、なかはすっかり撮影のための設備にしつらえてあるようだ。まっ白なスタジオの壁に天井からいくつも光が落ちていた。若い男の子が椅子やクッションなどを片づけている。どうやら撮影の後始末をしているところらしい。

「コーヒーでも飲みますか？」

と、河本青年はきいた。布由子は首をふった。

「いいえ、結構です」

「まあ、そんなに遠慮しないで」

河本青年は大声で隣のキッチンのほうに声をかけた。

「ヨッちゃん、コーヒーをふたつ。大急ぎでね」

「OK」

白いブラウスに黒いパンツをはいた若い女の子が片手をあげて答えた。河本青年がいつもの控え目な調子ではなく、どこかのびのびとリラックスした様子で振る舞っていることを布由子は感じた。ポスの中垣昇がいないと、どことなく彼は大人っぽい感じに変わる。裏おもてがあるというのではなく、やはりひとりの男性として

の意識がそうさせるのだろう。

「いろいろ彼女とも相談して考えたんですけどね」

と、彼は言った。

「東京で外国のオペラを観^みにくって、すごく難しいと思うんですよ。あんまり本格的に氣ばったんじゃ、なんとなくすぐわかないし。そうでしょう？ 上野の文化会館にしろ、渋谷のNHKホールにしろ、オペラの舞台がはねたあと、タキシードに白いマフラーをなびかせて、イヴニングの女の子の腕をとって歩くような、そんな背景じゃないもの。ぼくもときどき仕事でいくんだけど、NHKホールの手前あたりに、たこ焼き屋とか、おでん屋さんとか、屋台がずらつと並んでるじゃない？ やっぱりそれなりにくつろいで、しかも礼儀を失しないような感じがいいと思うんだ。ヨッチちゃんも同意見です」

「あのかた？」

布由子はキッチンでカップにコーヒーを注いでいる女性を目で追いかけて言った。

河本青年はうなずいた。

「そう。彼女、若いけどベテランのスタイリストなんです。もうずいぶん長いことぼくらと一緒に仕事してるんで、氣心もしれてるし、布由子さんのことちょっと話

したら、すごく興味をもつてね。一緒にお手伝いしましょうって」

「わるいわ、そんなことお願いしたりしちゃ」

「氣にしない、氣にしない。だって、いままでやってた仕事、すっかり気分が悪かつたんだ。口なおしにと言っちゃ申しわけないけど、ここで楽しみながらいろいろお手伝いをさせてもらいますよ」

「おまちとおさま」

金属の盆にコーヒー・カップを三つので、ヨッチちゃんと呼ばれた女性が近づいてきた。

「いらつしやい。あなたが小峰布由子さん？」

「はい。はじめまして。小峰です」

布由子は立ちあがって丁寧^{ていねい}に頭をさげた。子供のときから挨拶^{あいさつ}だけは父親にうるさく言われてきたのだ。

「わたし、木口^{きぐち}与志子^{よしこ}。変な名前でしょ？」

彼女はコーヒーを布由子の前に置くと、隣の椅子^{いす}に腰をおろして脚を組んだ。

男の子のように髪を刈りあげて、それが直線的な体つきによく似合っている。どちらかといえば小柄なほうだが、それでも、いかにもこういった世界の仕事を長年

やってきたベテランらしく、控え目でいながらすぐくセンスのよさを感じさせる女性だった。素顔に濃いまっすぐな眉がとても印象的だ。色は浅黒く、とても細い足首をしていた。

「あなた、今夜、オペラを観にいらっしゃるのね」と、彼女はきいた。

「ええ」

「演しものは？」

布由子はちよつと赤くなつて答えた。

「わたし、なんにも知らないんです。いきなり誘われたものですから、それにオペラのことは全然、知識がなくて。ごめんなさい」

「えーと、いま演つてるんだったら、たぶんミラノ・スカラ座ね。きようは〈ナブツコ〉だったと思うわ」

「変な名前だね。〈ナブツコ〉だなんて」

横から河本青年が言った。

「いずれにせよ、そういうわけで、ぼくが彼女のお手伝いをする事になったんだ。ヨッちゃん、協力してくれるよね」

「ええ。よろこんで」

彼女はちよつと顎を引くようにして布由子を眺めた。

「あなた、どういう服をいつもは着ていらっしゃるの？ いきつけのお店は？」

「とくにありません。ずっと福岡にいたんですけど、あんまりいろんなお店を見て歩いたりする機会がなかったんです」

「どちらかつていうと、あなた、年に似合わない地味な服が好きなんでしょう？」

木口与志子は、いたずらっぽい目付きで言った。

そう言われてみればそうかもしれない。本当は自分なりに洋服の好みもあるし、気に入っているお店も何軒かはあるのだが、でも結局、それを手に入れて着て歩くような、そんな機会がなかっただけなのだ。雑誌のグラビアに出てくるいろんな服を、ため息をつきながら眺めているのが精一杯だったのである。

「そうね、わたしに言わせていただければ、あなたはそんなふうに自分の体の線を隠すような服じゃなくて、もっと大胆な服を着たほうが面白いような気がするんだけど」

「え？ でも——」

「そのほうがいいわ。わたしを信じなさい。こう見えてもわたしは一応プロなのよ」

「はい」

体の線に自信があったら、本当は着てみたい服はたくさんあったんだわ、と布由子は思った。でも、自分のことは自分が一番よく知っている。たしかに彼女はプロのスタイリストかもしれないけど、でも、わたしはそんなタイプじゃない。

布由子は気恥ずかしさと、期待感が半分いりまじった気持ちのなかで、河本青年をふり返った。

「安心してまかせたほうがいいですよ。彼女はほんとに才能のある人なんだから」

「あら、カワモッチャンがそんなこと言うなんて、めずらしいわね」

木口与志子は立ちあがると部屋の隅のカーテンを引いて、そのなかに姿を消した。そしてすぐに何着かの服をハンガーにかかったまま腕に抱えてもどってきた。彼女はそれを部屋の中央のテーブルの上に並べてひろげた。

「あなたはそんなに大きくないから、かえてサイズの小さなイタリアの服のほうがあうんじゃないかと思うの」

彼女はそう言いながら布由子を手招きした。

「はい。これがわたしの選んだ三点。布由子さんはどれを選ぶかな？」

「この服、どうするんですか？」

布由子はびっくりしてたずねた。河本青年が横から説明した。

「これはきょう、女性の映画評論家の武田章子（たけだ しょうこ）という人の撮影に使った服なんだ。

彼女、ほとんどサイズはあなたとおなじくらいだし、それに親しいお店から借り出してきた服だから、今夜ひと晩、あなたに着てもらうのも面白いだろうと思って」

「そんなことして、だいじょうぶなんでしょうか」

布由子は不安になってたずねた。木口与志子が気持ちのいい笑顔をつくって、

「へいき、へいき。古いなじみの店だから、そんなことでとやかく言ったりはしないわ。さあ、ちょっと着てみて」

布由子は目の前に並べられた服をおずおずと指先で触ってみた。本当にこんなこととしていいのだろうか、と迷いながら、それでも頭のなかで、それらの服を着てオペラの舞台を眺め（なが）ている自分を想像して思わず心臓がどきどきするような気持ちになった。

20

午後四時半きっかりに布由子は公園通りの「ヘル・パソ」という店の扉（とびら）を押した。

た。

「あの子はいま、どうしているんだろう？」

と、彼女は考えた。

先ごろ東京から届いた手紙では、これまでつづいていたラジオの番組が、どうやら終わりそうだと書いてあった。その手紙は、どことなく元気がなかった。兄貴のように考えていた中垣さんのことが嫌いになりました、とも書いてあった。ひょっとしたらまた、布由子はいま、新しい転機にさしかかっているのかもしれない。沢木が言っていたように、病気を克服し、それを完全に治すなどというのは幻想なのだろうか。うつ病は、あの布由子の心の中で、ときおり小さくなったり大きくなったり、濃くなったり薄くなったりしながら、一生、彼女とともに生きつづけていくのだろうか。

布由子の手紙をしまうと、つづいて波留子はその下にある四角い封筒にはいった手紙をとりだした。それは警察に逮捕され、取り調べを受けていた時期の垂紀子からのものだった。長い手紙の真ん中ほどに、波留子は自分の名前を見つけた。そして、そこから読みはじめた。

「それにくらべて、波留子ねえさんは、自分のことを自分で知らないのです。あなたのなかに、火のように沸^なつていいるものがあることを知らずに、ほんやり暮らしている、といったら怒るかしら。

でも、私の感じるところでは、あなたがいちばん本当はあぶない女だと思っています。平凡に見えて、実はそうでない人。私は小さな子供のころから、あなたがなぜか怖かったのです。

こんなことを書きつづるのは、意味のないことかもしれません。でも、きょうは書きたいのです。

波留子ねえさん、おほえていますか。

ずっと昔、私がまだ小学生になる前のことだったと思うけど、近所の男の子たちを集めて、いわゆる「お医者さんごっこ」をしたときのことを。

たぶん姉さんは忘れてるでしょうね。でも、私は忘れません。私は男の子たちの性的に粗野な行為がともいやで、逃げ回っていたのですが、姉さんはそうではありませんでした。男の子たちの前で、自信たっぷりな下ばきをぬいで体を横たえ、微笑さえうかべながら患者になったのです。

そんなこと嘘^{うそ}よ、と、姉さんは言うかもしれません。もうすっかり忘れてしまっ

ず手にもったグラスの水をこぼしそうになった。でも、黒沢はほめてくれたのだ。そのことが布由子にはうれしかった。

木口与志子が出してくれた三つの服のなかから、布由子を選んだのはクリツイアのニットのワンピースだった。ニットといっても光沢のある柔らかな材質で、襟から胸元にかけて本物の金かと思われるような美しい黄金のビーズが太陽と月の形に大胆に縫いこまれている。黒と金のコントラストが、ひと目で布由子をひきつけたのだ。すこし着丈が長いような気もしたが、それでもシンプルななかなんとも言えない気品のある服だった。彼女が心配なのは、自分の体の線がほとんどそのまま服のラインにあらわれてしまうことで、そのことですこし躊躇はしたのだが、どうしても、その服に心を動かされてしまったのである。

木口与志子が軽いメイクをほどこしてくれ、髪をシニヨンにまとめてくれて、布由子は自分がひとまわり大人の女になったような気分でごこへやってきたのだった。「もうしばらく時間があるから、その前に、きょうのオペラのことについて少しお勉強をしておこう」

と、黒沢は言った。布由子は彼の言葉をひと言もきき洩らすまいと真剣に耳をかたむけた。

黒沢は相当にオペラに関する素養があるらしく、よどみのない口調でいきいきと話しはじめた。

まず、イタリアでオペラがどのように発達してきたかということ。ミラノという街にとってオペラがどれほど大きな存在であるかということ。ミラノ・スカラ座の歴史と、そのスターたちのエピソード。そして今夜上演される《ナブッコ》という演目の物語。ヴェルディという作曲家についても黒沢はやさしく丁寧に話してくれた。それからムーティという素晴らしい指揮者のこと。それにもまして舞台美術を担当したアーチストが、映画監督のヴィスコンティと組んでかずかずの名画の美術を手伝ったアーチストであること。それからミラノ・スカラ座の合唱の素晴らしさについて、など、黒沢は一時間以上も熱心に話しつづけた。

「もちろん、きょうの主役をつとめる歌い手たちの歌も聴き逃さないが、それより、ぼくが小峰くんに本当に聴いてほしいのは、それらのスターたちの背後でコーラスをうたっている合唱団のことだ。とくに《ナブッコ》のなかで、ユーフラテス河のほとりで囚われたヘブライの民衆たちがうたう《われらが想いよ、黄金の翼に乗って飛んでゆけ》という合唱は、死ぬほど素晴らしい。ぼくは、はじめてそれを聴いたとき、自分の魂のいちばん深いところがぶるぶる震えだすのを感じたほどだ。ヴ

エルデイの曲は平明で親しみやすいが、なにか人間に大きな民族の運命や歴史に参加させるような、そんなひびきがある。眠くなったら途中で寝たってかまわないけど、舞台美術の素晴らしさと、その合唱だけは、ぜひしっかり観て、聴いておくことだ。いいね」

「はい」

黒沢はちらと時計を眺めると、布由子をうながして立ちあがった。そしてふたりは黄葉した並木の下を、今夜のオペラが上演されるホールのほうへ肩を並べて歩いていった。

21

その晩の体験を、布由子は一生、忘れないだろうと思う。

はじめて観るオペラは、言葉のわからないせいもあって、布由子にはくわしい内容まではたどれなかったが、あらかじめ黒沢からうけたレクチュアのおかげで、おそよの物語は理解できた。

それよりも布由子を圧倒したのは、黒沢が言った通り、舞台に組み立てられたセ

ットの素晴らしさだった。豪華でいて、しかも気品を失わない舞台装置に、布由子はほとんど気絶しそうなくらいに感動したのだ。

そして黒沢の言った通り、合唱の素晴らしかったこと。囚われて奴隷の身におとされていいる民衆が、たそがれの河畔に集まって故郷の空を想いながらうたう（われらが想いよ、黄金の翼に乗って飛んでゆけ）の合唱は、布由子の体の細胞のすみずみまで揺り動かしたような気がする。

コーラスといえは上品にハーモニーをつくるだけのうたいかただと思っていた布由子の偏見を、一挙につき崩した合唱だった。男も女も、子供も青年も、そして老人も、ひとりひとりが全部、自分の声でうたいながら、それが大きな流れになって、あるときは繊細に、あるときは雄大に、人間たちの声がステージからまっすぐに布由子の胸にとどいてきたのだ。

布由子はそのコーラスを聴いているうちに思わず涙をこぼした。やがて肩が小刻みに震え、膝の上に置いた手の下で、恥ずかしいほど脚が震えだすのを布由子は感じた。すると、隣に座っている黒沢の右手が静かに、握りしめた布由子の手の上に重なった。そしてあたたかいものがその手からつたわってくるのを、布由子は混乱した気持ちのなかで感じた。

最後の幕がおりて、いつ果てるともないアンコールの拍手の渦のなかで、布由子は手を叩く力もなく、病人のようにぐったりと椅子に背中をもたせかけて座りつづけていた。

やがて場内が暗くなり、観客がほとんど引きあげてしまったとき、布由子は黒沢にささえられて、ようやくホールを出た。

暗い夜で、空を乱れた雲がすごいスピードで走っている。風が強く、黄葉した並木が身をよじるように揺れていた。

「ぼくは、きみがうらやましいと思う」

と、歩きながら独りごとのように黒沢がつぶやいた。

「あの合唱を聴いても、いまのぼくはもう、きみのようには泣けない。ムーティの指揮がどうだったとか、アビガイルレの役を演った歌い手のコンディションがどうだったとか、そんなことがどうしても頭のなかに浮かんできてしまう。人間、こんなふうになってしまったんじゃオペラを観る資格なんて、ないかもしれないね」

黒沢の言葉のひびきにはとても悲しげなものがあつて、布由子はふと、自分の肩を抱いている黒沢の手に手を重ねたいような気持ちになった。

〈今夜のことは一生、忘れないわ〉

と、布由子は思った。心のなかにまだ、あのへわれらが想いよ、黄金の翼に乗って飛んでゆけの合唱が、こだまするようにひびいていた。

22

黒沢に連れられてイタリア・オペラを観にいった翌日の午後、布由子は河本青年に昨夜借りたクリツイアの服を返すために青山墓地に近い喫茶店へ出かけた。スタイルストの木口与志子のオフィスがそのすぐそばにあるので、そこにきめた。

返す服を丁寧にたたみながら、布由子はとても残念な気がした。黒のカシミア・シルクのその服は、まるで指が吸いつくような何ともいえない手ざわりで、しかも黒といってもその黒の色の深さは、信じられないほど深い黒なのである。

〈一体、この服、いくらぐらいするんだろう？〉

しわにならないように間に腰のある紙をはさみながら、布由子は丁寧に服をたたんだ。

〈きつと何十万円もするにちがいないわ〉

値段の高いものが必ずしもいいものとは思わないが、それでも残念ながら贅沢

新しく旅立つ物語たちへ

五木寛之

どんな作家にとっても、忘れることのできない仕事というものがあるはずだ。

その作品の評価とか、反響とか、売れ行きとかに関係なく、である。愛着というのでもない。執筆にあたったの苦しみでもない。なぜか訳もなく深く記憶に残っている仕事である。

私にとつて、そんな忘れられない作品のひとつが、この『四季・奈津子』と、それに続く計四巻のシリーズだ。

【四季】シリーズの最初の巻である【奈津子】の連載は、【九七七年の夏にはじまった】。その当時、もつともとんがった女性誌だった「MORE」が舞台だった。そして二年後の一九七九年の七月に、この物語は完結している。

当時の「MORE」が、どれほど過激で鋭角的な雑誌だったかは、いま

ではすでに伝説である。黒人女性を表紙に起用したり、大胆なセックス・レポートを掲載したり、とにかく新しい都市型のマガジンだった。

七〇年代の後半、私は四〇代半ばの作家だった。巷には山口百恵やピンク・レディーの歌声が流れ、ウォークマンからはYMOのテクノポップスや、サザンの『勝手にシンドバッド』が響き、スーザン・ソントグの『写真論』が注目され、マイケル・チミノの『ディア・ハンター』が話題を集め、山口小夜子が日本人モデルとして「ニューズウィーク」に登場し、エトセトラ、エトセトラ、とにかくにも活気にみちた時代だった記憶がある。

徳大寺有恒など、才能あるモータージャーナリストが華々しく登場したのも、その頃である。いまの若者たちは、それほど車に関心がないという。海外旅行より隠れ宿的な日本式温泉が憧れの的らしい。

だが、一九七〇年代、世界の自動車は一種のオーラを放って輝いていた。『奈津子』のなかにしばしば車が丹念に描かれているのも、そんな時代の反映だろう。いまやガソリンエンジンの時代は去り、官能的な排気音にかわって、無音の電気自動車が目を集めている。

三〇年以上も前に書かれた物語を再読してみると、倍速、三倍速で走り去

る時代の映像を見るような感じがないでもない。

あの時代は良かった、などとは言わない。ただ、その頃は毎日がものすごく活気にみちていた、とあらためて思う。

「ナツコ」という資生堂の化粧品が売り出され、『四季・奈津子』も映像に、歌にと、波紋が広がっていった。私自身もこの時期には、『燃える秋』など、いくつかの長編小説を同時に連載している。『暗殺教団異聞』というテロリストの物語を書きはじめたのも、この頃だ。さまざまな理由で、その小説は未完のままに終わったが、とにかくそんな刺激にみちた時代だった。

『四季・奈津子』上下巻の単行本は、それぞれ七八〇円の定価で発売された。ハードカバーでその値段というのは、たしかに三〇数年の時の流れを感じさせる。

高度成長期の前ぶれともいえるヒロインの奈津子は、大胆で、エネルギーにみちた女性だ。鬱ふさの季節ともいわれる現在には、いささか場ちがいなタイブかもしれない。しかし、どんな時代にも未知の世界に憧れ、冒険をおそれぬ娘たちはいるはずだ。もし彼女が場ちがいに感じられるとしたら、むしろ時代のほうが病んでいるのではないかと私は思う。

物語のなかで、奈津子が恋人の達夫と食事をするレストランは、今でも福岡の街に健在だ。和田門というその店には、福岡を訪れたとき、今もなんとなく顔をだしたりする。

『四季・波留子』を書きはじめたのは、一九七九年の晩夏だった。翌年、

一九八〇年の秋に、その物語は意外にはやく完結した。

そして十年がすぎた。時代は大きく移り変わろうとしていた。私は五十七歳になっていた。『四季・布由子』を書きはじめた頃、私はなんとなく沈んだ淋しい気分しんじようのなかにいたように思う。きたるべき「鬱ふさの時代」への予感がどこからか心に忍びよってきたのかもしれない。

「衆生病しゆじやうやむが故にわが心病やむ」という。繊細せんさいで心やさしい人ほど、歪んだ時代の影響を受けやすいものだ。病んだ時代の空気に、敏感に反応する心は、自然に病まずにはいられないのではあるまいか。

今も時代は病んでいる。人がふと心に鬱ふさの気配を感じるのには、その人が人間のだからであり、傷つきやすい柔らかな心の持ち主だからだろう。

布由子は、私たちの心のどこかに必ずひそんでいる大事なものの影なのだ。奈津子が彼女のことを特に気遣うのは、奈津子のなかにも布由子がいること

の反映にほかならない。

そしてまた時間が流れた。一九九三年の春、私は『四季』シリーズの最後の巻を書きはじめようとしていた。

時代はすでにバブル崩壊後の逆風のなかにあった。私はすでに六〇歳台にさしかかり、なんとなく白夜のなかを生きているような気分だった。

一九九三年から九四年の夏にかけて、『四季・亜紀子』を書きながら、私は『奈津子』からスタートした物語の歳月を、あらためて噛みしめていた。シリーズの完結まで約十七年の歳月がかかっていたのである。

二十世紀末に書かれた物語が、いまこうして再びポプラ社で文庫化され、読者の手に渡されることとなった。そのことを私は、ふしぎな気持ちで受けとめている。

時代は変わっても、人間の感情は変わらない。知識が増え、風俗は移っても、人が抱く希望や憧れ、失望や悲しみは消えない。むしろ渦中にいるよりも、少し距離をおいたほうが良く見えるものがある。奈津子や亜紀子の日常が変化しても、時代を超えて読者に伝わるものがあるのではないか。それがどれほど難しいことかを、私とて知らぬわけではない。時代は急速に変わっ

ていく。ブラウン管から液晶画面になり、やがて3Dの時代がくるという。ラルフ・ローレンが登場し、マリメッコが話題になった時代から、ファッションも流行も大きく変化した。バブリーなエピソードも、いまはジョークと化している。はたしてこの『四季』シリーズがどう読まれるか、作者の私にも想像がつかないところがある。

以前、塩野七生^{しのなまき}さんと対談をしたとき、塩野さんがちよつとレトロな腕時計をしていることに気づいた。その私の視線を感じて、塩野さんはうなずいて言った。

「一九三〇年代のカルティエが好きで、いろいろ集めてるの。これもそう」『四季・布由子』のなかで、彼女がはじめてジャガーのXJ6を運転させてもらう場面がでてくる。文中で「ジャガー」を、「ジャグワー」とわざわざ書いているのは、当時の車好きのこだわりを表現したかったからだ。ハンドルと書くところを、わざわざ「ステアリング・ホイール」と表記しているのもそうだ。いまにして思えば、苦笑したくなるような子供っぽさだが、そのへんは大目に見すごしていただきたい。なんでもかでもエコ、という時代には、私はなんとなく物足りなさも感じるのである。

いまにして思えば、『四季』のシリーズは、私たち60、70の時代に生きた者たちの「夢のかけはし」だったのかもしれない。私はこの物語のなかで、「どうしようもない現実」を描こうとはしなかった。「どうしようもない現実」からの空想の旅立ちを描いたつもりである。

空想もまた一つの現実である。一冊の本を手にする読者には、すでにそのことはつきり感じられていることだろう。

時とともに忘れられている言葉や名前が、この物語には沢山つめこまれている。その単語は失われていく季節の里程標だ。二十一世紀に読まれる二十世紀末の物語は、同時代の読者とはちがう感覚で受けとられるにちがいない。『四季』シリーズの四冊が、どんな旅を生きたのか、いま私ははらはらしながら見守っているところである。

この作品は、二〇〇〇年に集英社より単行本として刊行された「四季・亜紀子」上・下巻を、著者の加筆修正を経て一巻にし、改訂新版としたものです。

編集協力 小さな森プロ